

共有するため、日本、韓国、中国、イタリア、スペインの研究者が、それぞれの国について、最近の人口トレンド、ジェンダー、家族紐帯、ライフコースの不確実性、そして政策について報告を行い、議論した。筆者はRaymo教授、Brinton教授と共に日本についての報告を行った。これらの議論を受けて、今後、同パネルでは、①ジェンダー、②ライフコースにおける不確実性と格差、③家族紐帯、④文化、⑤家族・結婚・出生のもつ意味、⑥交際、性交経験、パートナーシップなどの親密性の6つのテーマについて比較研究を行うことが確認された。また、これらのテーマのもとに研究を進め、今年5月にイタリア・ミラノ、10月に中国・北京で同パネルによる国際ワークショップを開催することとなった。同パネルの活動については、以下のURLを参照されたい。

<https://iussp.org/en/panel/family-behaviour-east-asia-and-southern-europe>

(福田節也 記)

ICPD25 ナイロビ・サミット

カイロで1994年に開催された国際人口開発会議（ICPD）が開催されてから25周年となることを記念して、2019年11月12日から14日の期間、ケニアの首都ナイロビで、ナイロビ・サミットが開催された。ICPDはその10年後、20年後の2004年、2014年とも、同様の大きな会議は開催されなかったため、今回はそれに代わるような会議であるともいえる。ただ、国連が主催する政府間会合、というわけではなく、ケニア政府、デンマーク政府及び国連人口基金（UNFPA）の共催、という形をとり、政府のみならず、多くのNGOや関心のある個人の参加があった。135にわたるセッションが開催され、人口と開発の中でも特に、ジェンダー、女性、少女、リプロダクティブヘルスをテーマとしたものが多数を占めたが、各国政府代表のスピーチも粛々と行われ、人口ボーナスや人口高齢化に関わるセッションもあり、筆者はそれぞれにパネリストとして参加した。

開会式には、共催者であるカネム UNFPA 事務局長、メアリー・デンマーク皇太子妃殿下、ケニヤッタ・ケニア大統領の開会挨拶の後、アミーナ国連副事務総長やムセベニ・ウガンダ大統領、モハメド・ソマリア大統領など隣国の元首も歓迎の挨拶をした。9,500人とも言われた参加者が全員入るくらいの特設会場は、閉会式にも参加者で埋め尽くされ、開会式と同じ人数が閉会式に参加するような会議は珍しい、とケニヤッタ大統領が閉会の挨拶で称賛すると会場から笑いが起こった。

人口と開発に関しては、中絶や包括的な性教育、LGBTなど多くの議論点があるが、今回のサミットではさすがにLGBTに関するセッションは見受けられなかったが、安全な中絶や包括的性教育に関するセッションがNGO主体に複数開催され、多くの充実した報告があった。一方で会場の外で中絶反対団体がビラを配るなど、波風が皆無であったわけではない。不妊に関するセッションもあり、体外受精に対する中・低所得国における高まるニーズとアクセスの不平等、インドなどにおける代理母問題などが議論されたのも興味深かった。

会議の内容は <http://www.naibisummiticpd.org/> や <https://tokyo.unfpa.org/ja/icpd> に掲載されている。

(林 玲子 記)

2019年人文地理学会大会

2019年人文地理学会大会は、2019年11月16日（土）～18日（月）に関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）において開催された。16日（土）に特別研究発表、17日（日）に一般研究発表（口頭発表）

表・ポスター発表)および研究部会等, 18日(月)にエクスカージョン(巡検)がそれぞれ行われた。筆者は17日(日)の一般研究発表に参加し, 人口に関連する報告を中心に聴講した。そのなかでとくに公募セッション「現代山村の存立構造」では, 人口減少が著しい山村地域における諸課題やそれらを克服しようとする地域の様々な試みが報告され, 将来の地域の持続可能性について考えさせられることが多かった。以下に, 人口に関連する主な報告タイトルを記す。

- ・西原純(静岡大学 名誉教授)「47都道府県の人口ビジョン策定の特徴とその達成可能性」
- ・豊田哲也(徳島大学)「就業者の都道府県別所得からみた地域格差と人口移動—2007~2017年就業構造基本調査の分析—」
- ・土屋純(関西大学)「阪神・淡路大震災後のコープこうべにおける供給事業の変革—人口減少, 高齢化に対応して—」
- ・西野寿章(高崎経済大学)「田園回帰期における山村の現状と地域的課題」
- ・作野広和(島根大学)「島根県邑南町における「地区別戦略」の成果と課題—山村の持続可能性を追求する—」
- ・中條暁仁(静岡大学)「過疎山村における寺院の無住化とその地域的要因」
- ・矢部直人(首都大学東京), 岡野雄気(首都大学東京・院)「訪日外国人の地方訪問に関する縦断データの分析」

(小池司朗 記)

第8回アフリカ人口学会

ナイロビ・サミットの翌週, 隣国のウガンダにて第8回アフリカ人口学会が開催された。多くのナイロビ・サミットの参加者が, そのままアフリカ人口学会に参加しており, 筆者もその一人である。会場はウガンダの首都カンパラの飛行場があるエンテベのホテルで, 2019年11月18日から22日の期間開催された。

国際人口学会やアジア人口学会と同様, 出生, 死亡, 移動, 分析手法など16分野にまたがる多くのセッションが行われ, 高齢化も一つの分野としてとりあげられていた。筆者は「サブサハラアフリカの保健・福祉分野人材—その人口面における国際比較」と題する報告を行い, また共著者として「サブサハラアフリカの女性の労働参画と人口ボーナス—アジア・ラテンアメリカからの教訓」と題する報告にも同席した。

「人口推計:方法、仮定と含意」と題するセッションでは, ウィルモス国連人口部長とオーストリア国際応用システム分析研究所(IIASA)のルッツ教授が, 自分たちが行っている世界人口推計についてその優位性を弁護する, というディベート形式で行われた。ウガンダでこのような話が聞けるとは意外であり, また興味深かった。今後は米国・シアトルのワシントン大学保健指標評価研究所(IHME)が世界人口推計を別途作成すとも伝えられており, 世界人口推計が乱立することも予想される中, 人口学会で, それぞれの違いを明らかにするような学術的な議論が行われることは重要である。

第8回アフリカ人口学会のプログラム, 報告内容等は <http://uaps2019.popconf.org/> から閲覧できる。
(林 玲子 記)